

# 幼稚園実習における学生の感情の波形とその要因 －効果的な実習指導に向けた検討－

林 恵、近藤 万里子、五十嵐 元子

## Analyzing waves and factors of the feelings of students in kindergarten practice ～ For effective training of the practice ～

Megumi HAYASHI, Mariko KONDO, Motoko IGARASHI

### Abstract

The purpose of this study was <sup>1)</sup> to find it clear to move the feelings of the students who had the first teacher's training in the kindergarten, and <sup>2)</sup> to detect events which make the students change from happy to unhappy. The subjects were 42 Japanese junior college students. They were asked <sup>1)</sup> to draw the movement of the feelings in a line graph during a day about first and eighth day and <sup>2)</sup> to describe freely about the change of feelings and the trigger.

The first result revealed that the students became happy when they watched children who was playing or participating in activities and interacted with children. But they didn't become happy by way of finding the mind of children. The following result showed that almost all of the students become unhappy when they had to write a childcare diary. We thought because the students weren't interested in finding the mind of children.

These results suggested that the students needed to learn to think the mind of children as putting themselves in children's place. Also, we have to plan the session when the students can consider each situation deeply for children.

### 要約

本研究では、初めての教育実習が終了した学生に対し、1日の気持ちの流れを視覚化するシートを利用した振り返りを行い、どのような出来事がきっかけで、気持ちの揺れが出現するのかを明らかにした。また、自由記述型のアンケートを通して、どのような背景がhappyな感情やunhappyな感情へと変化させるのかを明らかにした。その結果、子どもからのかかわりと子どもの姿によって学生の感情は変化し、子どもの内面の発見に伴う感情の変化はほとんど見られなかった。また、ほとんどの日誌を書くことをunhappyに感じ、そのことは学生が子どもを中心とした観点をもてていないことと関連していると考えられる。実習指導において、子どもが中心となる観点を持ち、一つ一つの場面の考察を深めていく力を身に付けられるような、授業計画を考える必要がある。

### I. 問題と目的

保育の振り返り・省察は、倉橋惣三の時代から保育実践を行っていくうえで大切な技能のうちのひとつであり、保育者の専門性として位置づけられてきたが(田代,2013) <sup>1)</sup>、近年になり、一層重視されるようになっている。その背景について、香曾我部(2011) <sup>2)</sup>は「子どもを取り巻く問題が複雑化し、多様化しており、それらに対応するための豊かな知識や高い技能が保育者に求められている現状」があることを指摘した。つまり、保育の振り返り・省察を通して、自らの保育を

柔軟に展開していく力量がより重視されるようになったと言えよう。このことは、平成23年、「保育者論」が新たに設置され、保育の振り返りや省察に関することが大きく扱われるようになったことから、保育者養成段階にも大きく影響を及ぼしていると考えてよいだろう。

だが、実際に、保育現場における保育者による保育の振り返りと省察を、学生に求めることは難しく、同様に扱うことはできない(野尻・栗原,2006) <sup>3)</sup>。学生にとって、振り返りや省察の出発点は、実習を通して、

「自己を振り返り、反省点や次への課題を見つけ、常に先を見据えた思考を持つこと（大谷・平化,2012）」<sup>4)</sup> となろう。そのために、指導を行う側が、何を振り返り、これからどのような学習が必要になるのか、ある程度の枠組みを用意し、実習日誌・振り返りのためのレポート等を課題にしてきた（野尻・栗原,2006）<sup>3)</sup>。従来、その枠組みは、実習生の実習での学びの達成度を実習園が評価するための評価票に基づくものが多かったが、本報告は、実習時に喚起する自らの感情やその動きに注目した。実習期間中、学生がどのようなことに喜びを感じ、実習の意欲へとつなげていくのか、どのようなことに悲嘆し、それを乗り越えていくのかを明らかにすることは、今後の教育実習における事前・事後指導の課題を検討する材料になるであろう。

そこで、本報告は、①1日の気持ちの流れを視覚化するシートを利用した振り返りを行い、どのような出来事がきっかけで、気持ちの揺れが出現するのかを明らかにし、②自由記述型のアンケートを通して、happyな感情とunhappyな感情が生起する背景を探り、効果的な実習指導の在り方について検討をおこなう。

## Ⅱ. 調査Ⅰ

### 1. 方法

#### (1) 調査時期と対象

2016年10月10日～10月24日にかけて、保育者養成校に所属する学生42名（男性3、女性39名）に対し、感情を波形として記述するアンケート調査を実施した。なお、本研究では初めての幼稚園実習（10日間）を終えた学生を調査対象とした。

#### (2) 調査内容

##### ①基本的属性について

調査対象者の学年を尋ねた。

##### ②調査の内容

本調査は、学生の実習中の1日の感情の変容過程を波形として捉えようと試みたものである。星山麻木著書『書き込み式子育て手帳 あなたへのおくりもの』<sup>5)</sup>のプログラムの1つである母親の1日の感情の変容過程を記録するために開発された方法を参照した。著者からの許可は了承済みである。これは、自分自身の1日の感情の変化を視覚的に提示させることにより、自己理解を促し、自分と周囲との関わり方について再認識することを目的として作成されたものである。本調査では、この星山氏が作成した記録用紙を用い、学生

に実習1日目と8日目の感情を振り返りながら記入することを依頼した。

感情を記録するポイントは（起床・園到着・園児登園・午前活動・昼食・午後活動・園児降園・放課後活動・退出・帰宅・余暇時間・就寝）の12項目とした。その時々感情を（happy・ふつう・unhappy）の3段階を指標とした。

また、指標の各ポイントにおいては、ポイント時点の感情を言語化し記述することを求めた。言語化した感情は吹き出しを作成しその中に記述するよう依頼した。

#### (3) 倫理的配慮

調査目的、調査内容、データの処理方法、調査の結果の使用およびプライバシーの保護については、口頭で説明した。さらに調査の回答内容によって、一切の不利益を被ることがないことを説明し、以上の内容に理解を得られたものに調査を実施した。記録用紙はID番号を付して管理し、データ処理を行った。

#### (4) 分析方法

まず、記録用紙では3段階で示した感情の指標を、分析段階では10段階に分け、それぞれの項目における数値を平均化し、グラフを作成した（Fig.1-1.1-2）。また、各項目の感情の記述を図2に整理した。記述内容については、テキストマイニングソフト（KH Coder）を用い、クラスター分析を行い、分析結果に基づいてカテゴリー化を行った。

次に、感情の変化を数値で表し、その各ポイントにおける最大数を示した要因を抽出し箱ひげ図によって可視化した（Fig. 3）。箱の中心線が感情の変動値の中央値、箱の外線の両端が最大値、最小値を示す。感情の変動値はポイントとした事象（起床、園に着く、子ども登園）等を、1つ前の事象との感情値の差で表した。

## 2. 結果と考察

1日目と8日目では気持ちの波形にほぼ違いは見られず、子どもが登園してくるポイントで感情は大きく上昇し、子どもが降園するポイントで大きく下降することが特徴として見られる（Fig.1-1, 1-2）。この2つのポイントにおける感情の上昇・下降の要因について、図2を見てみると、「子どもが可愛い」（40.5%）「子どもが帰ってさみしい」（59.5%）という記述があり、学生にとって、実習期間中、子どもの存在が感情の上下

と関わっていることを示唆している。

さらに子どもが降園してからの学生の感情に注目すると、大きく揺れることがないように見える (Fig. 1-1、1-2) が、これは上昇要因と下降要因が相殺し合っていることが考えられる。その背景を Fig.3 から探ると、降園後の「友達と電話」要因が感情の上昇と、「日誌」要因が感情の下降と関連している。「友達と電話」を要因として挙げた学生数は (帰宅: 14.3%、自宅: 4.8%) と「日誌」を理由として挙げた学生に比べ (帰宅: 28.6%、自宅: 71.4%) と少ないが (Fig.2-2)、「日誌」の中央値-5.0に比べ、「友達と電話」の中央値は「子ども可愛い」(中央値4.0)と同じ4.0という数値を示している (Fig.3)。つまり、友達と電話をしなかった学生もいるが、友達と電話をした学生は子どもに出会った時と同程度のhappy感情へと変化したのである。これにより、「帰宅」「自宅」のポイントでは、「友達と電話」と「日誌」の要因が相殺し合い、Fig.1-1、1-2、に示されるようになだらかな波形となっていると考えられる。つまり、実習において友達という存在が実習における unhappy感情から happy感情へ変化させる1つの要因となっていたと言える。

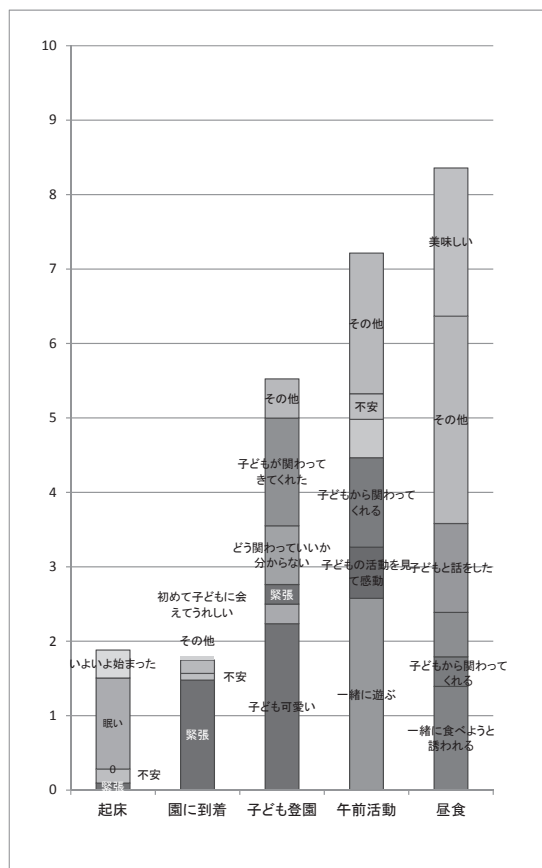


Fig.2-1 要因の割合 (前半)

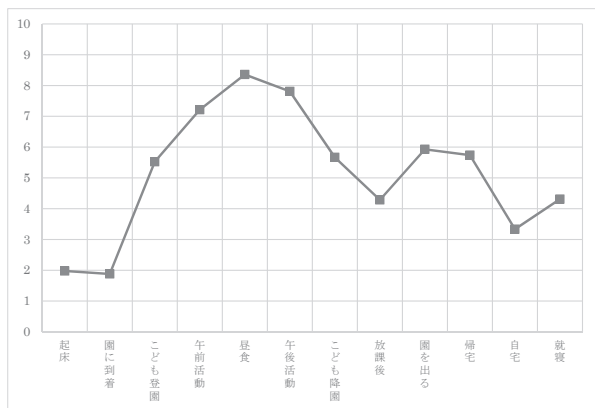


Fig.1-1 感情の波形 (1日目)

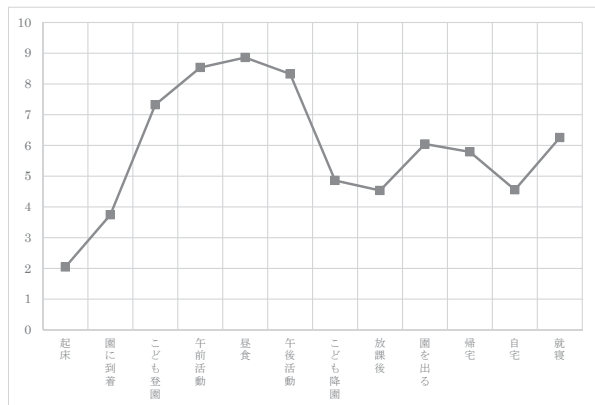


Fig.1-2 感情の波形 (8日目)

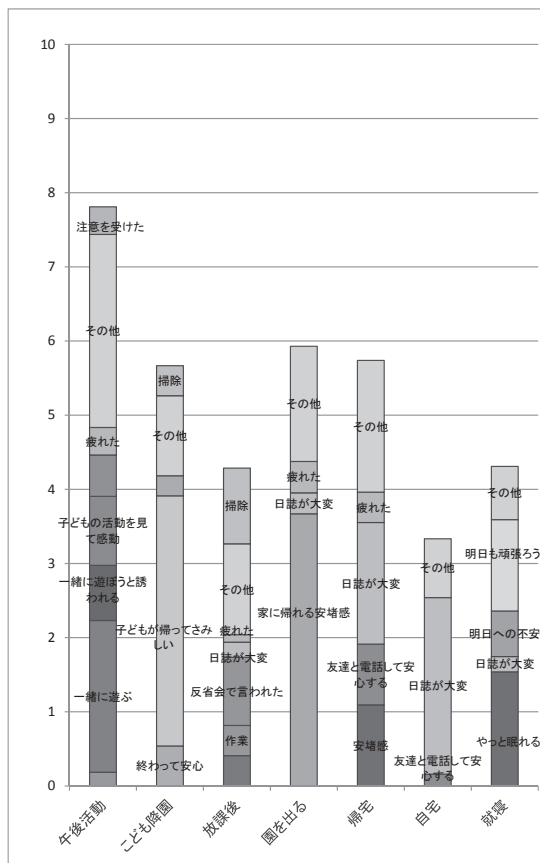


Fig.2-2 要因の割合 (後半)

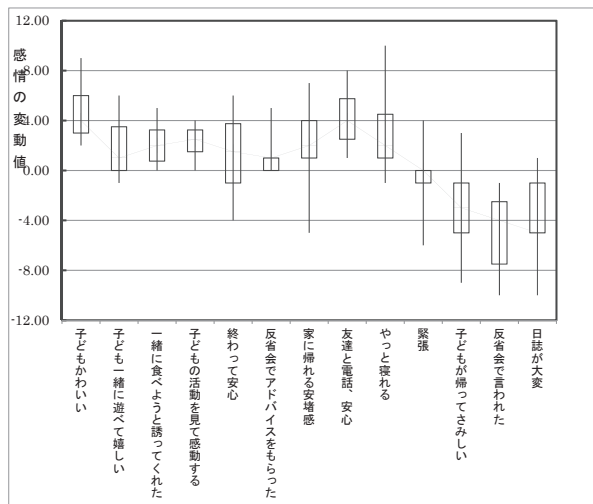


Fig.3 感情の変動値とその要因

### Ⅲ. 調査2

#### 1. 方法

##### (1) 調査時期と対象

調査1と同様である。

##### (2) 調査内容

###### ①基本的属性について

調査対象者の学年を尋ねた。

###### ②調査の内容

本調査は、初めての幼稚園教育実習を終えた学生に対し、実習中の自分の感情に注目し、happyな感情への変化とunhappyな感情への変化の背景について質問紙で尋ねたものである。

調査1に回答した後、「自分のことでわかったこと」と題し、実習における具体的な場面を思い出しながら、次の2項目について、自由記述を求めた。

<質問項目>

①嬉しかったと思うとき、どのような出来事が関わっていると思うか (happyな感情への変化)

②悲しい・つらい・気持ちが沈んだとき、どのような出来事が関わっていると思うか (unhappyな感情への変化)

##### (3) 倫理的配慮

調査1と同様である。

##### (4) 分析方法

自由記述から得られたデータについて、テキストマイニングの手法を用い、包括的に内容分析をおこなった。テキストマイニングとは、定型化されていない文

章の集まりを自然言語解析の手法を使って単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析して有用な情報を抽出するシステム<sup>6)</sup>である。

本研究では、テキストマイニングソフトであるKH Coderを用いて分析をおこなった。記述から得られたテキストについて、頻出する語句、および語句と語句の結びつきを表示する共起ネットワークを1.うれしかった時、すなわちhappyな感情へと変化した場面と、2.悲しい・辛い・気持ちが沈んだ時、すなわちunhappyな感情へ変化した場面の2項目において作成した。

## 2. 結果と考察

### (1) happyな感情への変化

質問紙の自由記述「1.うれしかった時」の全記述から、名詞、形容詞、形容動詞、頻出度数は4回以上に限った頻出語をTable 1に示した。この際、「自由遊び」等の保育に関する用語は「自由」と「遊び」と分けずに一つの語になるよう、強制抽出の処理をおこなった。次に、同テキストデータから、頻出語4語以上を対象に共起ネットワークを作成した。

Table 1

Table 1 happyな感情への変化  
頻出後と出現回数 (4回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	50	やる	6
する	30	運動会	6
先生	26	笑顔	6
言う	22	遊び	6
遊ぶ	17	話しかける	6
呼ぶ	13	ほめる	5
一緒	12	関わる	5
昼食	12	緊張	5
なる	9	作る	5
自分	9	保育者	5
名前	9	おはよう	4
来る	9	かける	4
誘う	8	見る	4
練習	8	手	4
自由遊び	7	声	4
食べる	7		

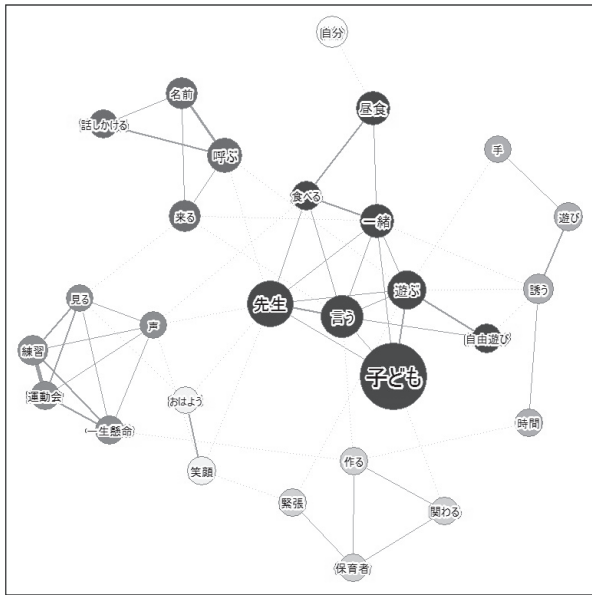


Fig.4 happy な感情への変化場面の頻出語による共起ネットワーク

頻出語では「子ども」が50回と最も多く、次に「する」「先生」「言う」「遊ぶ」と続く。また、共起ネットワークからは大まかに6つのネットワークを確認ことができ、Table 2 のように分類した。第1ネットワーク「子ども」「先生」「言う」「遊ぶ」「自由遊び」「一緒に」「食べる」「昼食」、第2ネットワーク「話しかける」「名前」「呼ぶ」「来る」、第3ネットワーク「手」「遊ぶ」「誘う」「時間」、第4ネットワーク「運動会」「練習」「見る」「声」「一生懸命」、第5ネットワーク「緊張」「保育者」「関わる」「作る」、第6ネットワーク「笑顔」「おはよう」である。

第1ネットワークからは「子どもが先生と言う」場面、「子どもが昼食を一緒に食べようと言う」場面、「子どもが自由遊びで一緒に遊ぼうと言う」場面等が浮かび上がる。第2ネットワークからは「名前を呼んで話しかける」「名前を呼んで来る」場面、第3ネットワークからは「遊びの時間に手を（つないで）誘う」場面、第4ネットワークでは「運動会練習を一生懸命やっている場面を見る」場面が想起される。第5ネットワークでは「保育者が関わってきて緊張する」、第6ネットワークでは「笑顔でおはよう（と言う）」場面が想起されるが、共起ネットワーク上、第5、6ネットワークは隣接しており、ここでは「保育者が関わる場面で緊張するが、子どもが笑顔でおはようという」ことでhappyな感情に変化したと考えるのが妥当であろう。

これらの分析を、元のテキストデータと照らし合わせて考えてみる。第1、2ネットワークに関連する自

由記述を確認すると「昼食を食べるとき『先生今日はこっちの席ね』『先生今日はこっちだよ』と声をかけてくれた。」「私の名前を呼んで帰るときにハイタッチをして私のところまで来てくれた。」等、主語は「子ども」であることが確認できる。また、第3ネットワークについても同様に、「子どもと遊んでいる時に、私の手を取り合って遊びに誘ってくれた。」「外遊びになったら『（学生の名前）先生遊ぼう』と手を繋いでくれた」との記述があり、やはり主語が「子ども」であることがわかる。また、第5、6ネットワークに関連して「子どもが園の外から見えたときはすごくかわいくて、保育者だけでなくそこに子どもが入るので緊張もほどけ、更に子どもが『（学生の名前）先生』と呼んでくれたり『（学生の名前）先生、遊ぼう』と誘ってくれた。」という表現も見られた。

これらのことから学生がhappyな感情へ変化する主な場面は①子どもから実習生への関わり（呼ぶ・誘う・挨拶）②実習生が好ましいと思う子どもの姿（一生懸命・かわいい・笑顔）、に分類された。

Table2 Fig.1 ネットワークの細分化とその内容

ネットワーク	ネットワークを構成する語	ネットワークから想定される場面
1	子ども、先生、言う、遊ぶ、自由遊び、一緒に、食べる、昼食	子どもが先生と言う 子どもが自由遊びで一緒に遊ぼうと言う 子どもが昼食を一緒に食べようと言う
2	話しかける、名前、呼ぶ、来る	名前を呼んで話しかける 名前を呼んで来る
3	手、遊ぶ、誘う、時間	遊びの時間に手を（つないで）誘う
4	運動会、練習、見る、声、一生懸命	運動会の練習を一生懸命（やっている場面）を見る
5	緊張、保育者、関わる、作る	保育者が関わり緊張する
6	笑顔、おはよう	笑顔でおはよう（と言う）

## (2) unhappyな感情の変化

質問紙の自由記述「2. 悲しい・辛い・気持ちが沈んだ時」の全記述から、名詞、形容詞、形容動詞、頻出度数は4回以上に限った頻出語をTable 2に示した。この際、「降園」等の保育に関する用語は強制抽出の処理をおこなった。次に、同テキストデータから、頻出語4語以上を対象に共起ネットワークの検討を行った。





happyな感情に変化し、子どもが帰ると寂しさを感じunhappyに転じる。また、実習生が好ましいと感じる

Table4 Fig2 ネットワークの細分化とその内容

ネットワーク	ネットワークを構成する語	ネットワークから想定される場面
7	日誌、書く、終わる、寝る、帰る	(家に)帰ると日誌を書かなければならないので寝ることができない。
8	朝、起きる、早い、大変、掃除	朝早く起きなければいけなくて大変だ。掃除が大変だ。
9	時間、思う、始まる	(朝)時間になると(また)始まると思う。
10	子ども、緊張、降園、気持ち、眠い、不安	子どもが降園するとき。眠く不安な気持ちになる。
11	注意、つらい、毎日、考える、自分、言う、少し	(保育者から何か)言われる。注意を受けつらい。

ような子どもの姿を見たときにhappyに変動する。北見・五十嵐 (2014)<sup>7)</sup> は本調査と同様の学生への調査を実施し、実習に対する不安が大きい中で、子ども達の方から名前を呼んでくれたり、声をかけてくれたりすることは、実習をおこなう上で、学生にとって安心できる出来事となっていると述べ、実習に対するストレスの緩和に関わることを示唆している。子どもからの関わりや子どもに姿に関連した学生の経験は、実習に一定の効果をもたらしていると言えるが、ここには受け身である学生の姿が浮かび上がってくる。子どもと関わりたいと考えても、その方法が分からず戸惑い(Fig.3)、子どもからのかかわりに安堵しつつも、自ら子どもの内面に気付き、その発見に伴う感情の変化についての記述はほとんど見あたらない。学生が自分自身の立場から子どもの立場へと視点を変え、子どもの内面に寄り添うことの困難さを示していると思われる。

栗原 (2014)<sup>8)</sup> は実習前の学生が不安を抱くそれぞれに底通しているのは、子どもの主体も見えない、目的も見えない不安であるとしている。そのため、自分を主体としなければならず、「子どもに対して何ができるのか」という不安ではなく「自分がどう見られているのか」ということに焦点化されているとしている。また、太田ら (2008)<sup>9)</sup> は、保育実習を経験した学生に対する聞き取り調査を実施し、学生は指導保育者の目を気にするあまり、子どもへのまなざしを十分に注ぐことができず、学びが浅くなってしまう場合があると述べている。調査Ⅱのunhappyな感情に変化した場面のテキストデータを振り返ると「初めての实習で粗相をしないように気を遣っていた」「10時間くらい周りの目を気にして気を張っていなければならないのだと考えると憂鬱だった」との記述があり、本調査の学生もそのような傾向にあることが推測できる。

さらに、unhappyに感情が変化する大きな要因には、実習日誌とそれに関連した睡眠の不足の問題があげら

れる。多くの学生が「日誌が終わらなくて夜遅くまでかかった」「全然メモが取れなくて、日誌の書き方が分からなかった」などと記述している。実際巡回の際にも「気づきに何を書いたらよいかかわからない」と訴える学生や、気づきを書く欄に子どもの動きや保育者の動きをそのまま記録する学生が多数いた。実施したことや起こったことなどをひたすら記述している日誌が目立ち、一つの出来事に焦点を当て考察を深めた記述はあまり見られない。このことは先の子どもの立場にたち、子どもに寄り添うという、子どもを中心とした観点がもちづらいことが影響していると考えられる。

また、happyな感情へと変化する要因に「友達との連絡」があげられた。インターネット環境の普及によりLINE等でやり取りや無料のアプリを介した通話などを利用し、帰宅してから友達と実習の情報を共有することが、日誌を書かなければいけないunhappyを緩和させていると考えられる。

そしてunhappyな感情へと変化する要因の一つに間接業務である掃除が複数あげられていた。このことは学生自身の生活経験の薄さや掃除の意義の理解が深まっていないために、掃除をすることへの否定的な感情が生まれやすかったと思われる。

今回の結果では学生にとって子どもを中心とした観点をもつことが非常に難しく、そのことは日誌の記録への戸惑いとunhappyな感情に影響することが予想された。栗原 (2014)<sup>8)</sup> は、観察実習の意義は子どもの主体性と出会い、意識の方向性を（自分ではなく子どもへと）変えることにあり、自分の解釈で自分を主体に据え置いて、大人の文脈で解釈しては子どもの主体性と出会うことが出来ないとして述べている。また、さらにそのことを含め、子どもに自分がいかにかかわれるのか（援助できるのか）といったことを探求する必要があると述べている。本調査は初めての教育実習が終了した学生を対象にしたものであることから、今後学生が学習を進めることで、子ども達を中心とした観点を身に着けていくことは予想されるが、実習指導において、子どもが中心となる観点を持ち、一つ一つの場面の考察を深めていく力を身に着けられるような、授業計画を考える必要がある。

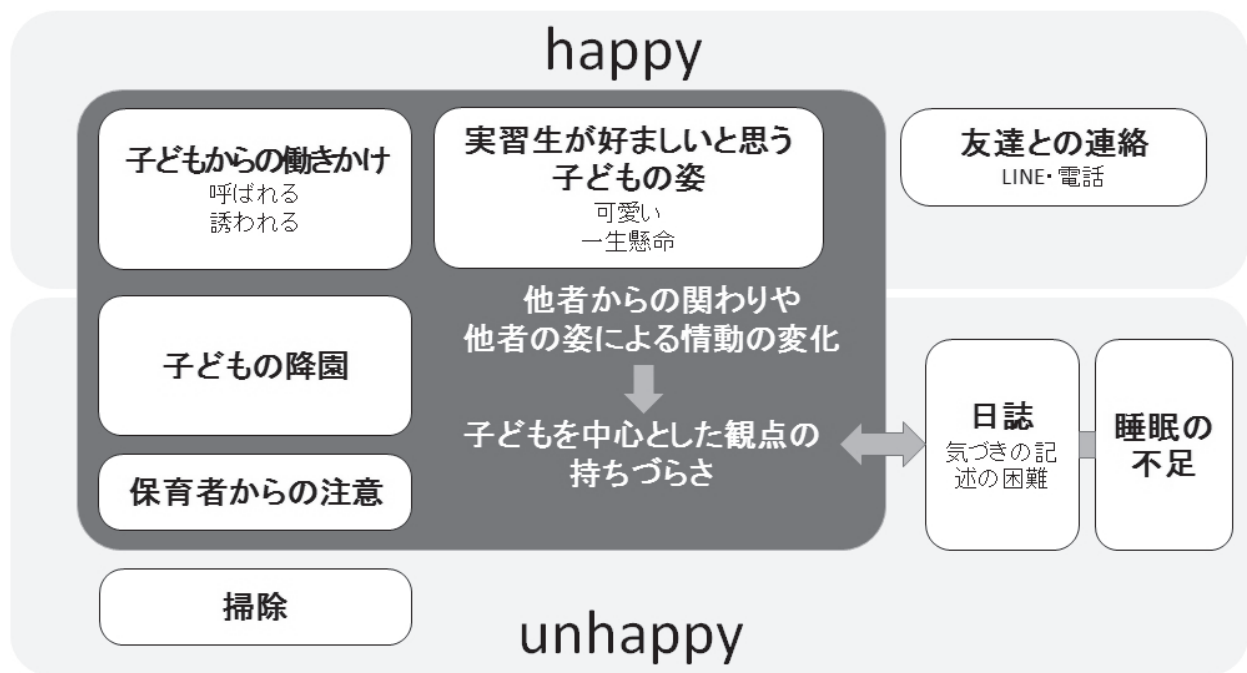


Fig.6 happy な感情と unhappy な感情が生起する背景の関係

#### <引用文献>

1. こどもと共に生きる在りようを問う視点からの省察についての一考察 —A・シュッツの自己理解と他者理解についての論をふまえて— 田代和美 日本家政学誌 Vol64.No6. pp.299-306 2013年
2. 保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題 香曾我部琢 東北大学大学院教育学研究科研究年報第59集第2号 pp.53-68 2011年
3. 幼稚園教育実習における反省的思考について—実習日誌に記述した内容から 野尻裕子・栗原泰子 川村学園女子大学研究紀要 第17巻第2号 pp.23 - 31 2006年
4. 保育者養成課程における実習に対する課題と不安の変容 大谷彰子・平化恵美子 甲子園短期大学紀要 pp.67-73 2012年
5. 星山麻木「書き込み式子育て手帳 あなたへのおくりもの」河出書房 pp.22-45 2012年
6. IT用語辞典 e-Words <http://sp.e-words.jp/> (2016年11月2日閲覧)。
7. ポジティブな体験に着目した保育実習指導について—振り返りアンケート調査による検討— 北見由奈・五十嵐淳子 健康心理・福祉研究 (桜美林大学) 2 pp. 37-42 2014年4月
8. 幼稚園教育実習 I における観察実習の意義：実習前後アンケートから探る 栗原ひとみ 植草学園大学研究紀要 6 pp.69-78, 2014年3月
9. 太田光洋, 高木勲, 中山智哉「感情労働の観点か

らみる保育実習における学生の学び」保育士養成研究 (26) pp.39-46 2008年